

日野 勇太・ヴォーボモン、鬼塚 光・デビドラモン、國代良子・アグモンの3人はデジタル庁デジモン対応特務室からのバイトを受け、トラロックモンを DW への移送のため茨城県へ遠征に来ていた。

勇太・光、17 歳の夏、関東圏全域に勇太の光への告白が放映される珍事から一年が経過していた。

余談になるがその間に色々あった、各親族への事の説明、特に苛烈だったのが、光の祖父母…特に祖父であった。

珍事の次の日には、光の祖父に呼び出され関係性について半日問いただされる事となった。

しかし、実際に問いただされたのは最初の約 10 分であり後は光と祖父の喧嘩であり、その間勇太は祖母にお茶を頂いていた。

その後、光の父親がデジモンになって帰ってきた、暗黒人妻との対峙等色々あった。

色々あった…色々あったなかである意味一番勇太の心に影を落としたのは周りの冷やかしや各親族からの詰問、生暖かい目ではなかった。

勇太も光も年頃である。

17 歳の夏、そういった恋人同士の性行為もする年代である。

もちろん避妊具も付けたし、光の過去もあり両者の合意も必要以上にとった。

そしていざ、本番という時…勇太は緊張のあまり全く勃起しなかった。

よくある話でもあり、光もそういった輩は見えてきたから本心から気にしてもしなかったが、勇太の自信は自分自身にパートナーへ処女性を求めてのじゃないかと必要以上に悩み勝手に傷つき、自信がボロボロになり、光がそれとなく誘ってもそれとなく躲けていった。

光自身も正直過去の事もあり、性行為自体に積極的ではなかったが、それ以上に自分自身の肉体、精神に絶対的な自信を持っていた。

有体に言えば、超ウルトラ究極美少女鬼塚 光ちゃんに対してなんだその態度は。という怒りであった。

勇太自身の悩み、ヤレばいい。という事ではないのは理解しているがそれを上回る怒りであった。

余談から戻り、今に至る。

トラロックモンの影響で、千葉県全域が暴風雨に覆われていた。

しかし、究極体の膨大な容量の問題故かトラロックモンのリアライズは中途半端になり、暴風雨を起こす事で殆どの力を使い果たしていた。

更に幸運かつ奇妙な事に雨は匂い、触感、音等の実存を確信させるものはあってもその実体である水滴は DW に流れ込んでるため、洪水等の影響はなかった。

勇太達はトラロックモンを追い詰めたが、実際に存在しないとはいえ、視覚や聴覚情報を奪われ事故等のリスクはあった。

気付けば、勇太と光は他の面子とはぐれていた。

雨を凌ごうと避難した先、そこはラブホテルであった。

フロントがないタイプなのか

勇太は光の前であるにも関わらずやってしまった。と分かるように手をこめかみに付け溜息を吐いた。

現在も戦闘が進行中であるのは分かっているが、光はそのリアクションに青筋が立った。

「とにかく、なんとか皆んなと合流しな…良子さんから着信みたい。」

勇太はスピーカーで光に聞こえるように会話を始めた。

『あっ！私私！良子！うん！そう！なんとかトラロックモンは DW に還したよ！いや～勇太君達とはぐれたときはヤバいかと思ったけどデュナスモンとアポロモンが居て助かったよ！

あっうん。ふたりともお腹空いたのか戻ってるよ。

うん！丁度ビジホの上で決着ついてさ！デジ対にも連絡取ったら暴風雨は今が 22 時くらいだから…明け方頃までは残るって私達はそのままビジホに避難するけどふたりは？なんとか迎え…「私達も宿泊施設に避難したから大丈夫です。」

横から光が割り込んできた。

『よかった～はぐれたところ、たんぼしかないからしんぱいしてたんだ～！』

『勇太～！じゃあ明日迎え行くから気を付けてね！』

「あっちゃっと！…切れた…。」

光に非難の目を向けると光は顔を真っ赤にして勇太の袖をちょこんと掴んでいた。

…勇太の顔も見見る赤くなり…そして腹を括った。

フロントは無人の形式でかつ、ふたりも私服であったためバックルームの社員にも未成年であるのは気付かれなかったようであった。

部屋を選択して、料金を精算している際もふたりは始終無言だった。

部屋に入って荷物を置いた際に、はじめて光から言葉が発せられた。

「先、シャワー浴びたら？」

「はい!!!!」

光に促されるままに、シャワーを浴びる。

心臓は高鳴り、呼応するように肉莖ははち切れんばかりに勃起していた。

（このままだったらなんにも問題ないのにな…）

はぁ…溜息を吐いた。

「入るわよ…」

「ヴェぁ!?ひひひひひかり!!!？」

「なによ、うっさいわね。」

「何回も見たでしょ?そんな騒ぐもんでもないでしょ?」

「そう言われると…まぁはい…。」

そのまま、光は浴槽に入った。

「うん。」

「?」

「察しが悪いわね、一緒に入ろって言ってるのよ。」

「あっ…あぁそうだね。」

勇太は光に促されるままに湯船に浸かった。

「なんで、離れてんのよ?隣来なさいよ。」

「ウス…失礼します…。」

「なによ、改まっちゃって。」

ここに来て、初めて光はクスリとだが笑った。

勇太はチラリと光の方を見ると湯船に揺れてタオルがはだけ、微かにだが乳房や陰毛が見える。

出来るだけ気にしないようにしてても視線が吸いつけられてしまう。

「…」

…ジトっとこちらを見る光と勇太の視線はしっかりとあった。

「「…」」

「あんた…「はい！」」

「うっさいわね！もう！」

そう言うと光は勇太の肩に頭を乗せた。

「っ…！」

「…何も言うな。」

「あっはい…。」

「あんた、前の時からふたりでこういう雰囲気になりそうな時、それとなく避けてたでしょ。」

「あ～ウス…。」

「結構傷ついたんだけど…。」

「ごめん…。」

「別に、穴に棒挿入れるだけ恋人って訳じゃないでしょ。」

…まあ私はいいけど。」

「いや…言い方。」

「真面目な話よ。」

こうやって肌を合わせてるだけでも…その…幸せなのよ。」

光は自分の手と勇太の手を絡めて顔を赤らめる。

「男ってそういうの上手くできないとショックなのは分かるけど、その…こうやって触れ合えないのも…さみしい。」

「…ごめ…ん。」

勇太は言葉では謝罪が出たが頭は潤んだ光の瞳に釘付けになっていた。

前の失敗での不安や光を寂しがらせてしまった罪悪感よりも目の前の女性を求めて、気付いたらふたりは唇を重ねていた。

「んっ…はぁ♥…ん♥」

気付けば、ふたりはいつもの啄むようなキスではなく、ナメクジのように息もするのを煩わしく思えるほどにお互いを求め合った。

身体を拭くのも忘れ、そのままベットに雪崩れ込んだ。

濡れた身体と汗と蒸気が混ざり合い、何かのひとつの軟体生物の様であった。

お互いの陰部はまるでオーガニズムに達しているかのように体液が溢れていた。

先に、それに触れたのは光であった。

勇太の腰に手を回し、手繰り寄せたら腹部…子宮の位置に勇太の亀頭が当たった。

「きゃっ!?…えっあんた前より大きくなってない？」

「えっ…あっごめん…。」

「もう、謝るんじゃないわよ。ビックリしただけよ。」

あんたって本当童貞よね。」

「うぐ…。」

「違うわよ。可愛いって事よ。」

…それに。」

光は自分の陰口に勇太の手を宛がう。

「…ん♥」

「…私の事、はしたないと思う？」

「まさかっ!その…俺で…そうしていただくと大変嬉しい…で…ございます。」

「なによ、全くその敬語。」

私も同じよ。あんたが…前以上に私を求めてくれてるのが堪んなく嬉しいの。

あんたは気にしすぎなのよ。去年も自分がどうか言って、自分に求めすぎなのよ。

あんたが私の事を大好きなのは大大大前提としても。私が、あんたの事嫌いになる訳ないでしょ？」

「光のそういうとこ俺好きだよ。」

「何よ、惚れ直した？」

…ねえ…来て？」

勇太が自分の陰茎に避妊具を着け振り向くと、光は仰向けになり、秘部を自分で開いた。

ぱくりと開いた肉の洞穴は濡れ光る粘液を垂らし、肉々しいピンク色の粘膜が淫猥にヒクヒクと動いていた。

勇太は唾を呑む。

前は、上手くやらなければならないという勝手なプレッシャーがあったが、今は光のお陰かいいい意味でリラックスしていた。

勇太は、光に宛がわれ脚の間に腰を入れる。

光の表情も色めきを増して、少し不安そうな表情が意外であったが、それが勇太の劣情をより刺激した。

光の髪色のような綺麗な銀色の陰毛の下の濡れた秘部に陰茎を宛がい、亀頭で肉弁を弄っていく。

「んっ♡」

光は悩ましい表情で喘ぎ、腰を、身体をうねらせる。

亀頭が肉壺に包まれ押し入って行く。

ぬちゃりと粘液状の音が確かに聞こえる。

「っ♡」

光が声にならない喘ぎ声を漏らし胸を突き上げ、勇太の首に腕を絡ませ、耳元に顔を持って行く。

愛おしい恋人の顔がすぐ横になり、喘ぎ声と生暖かい湿った息が耳にかかる。

勇太は自分の身体に走る快楽に目を開けていられず、視覚ではない、快楽を全身に感じていた。

「っ…!」

オナニーでは感じられない雄として満足感を全身が走った。

…そして同時に、

「ちょっと…たんま射精そう。」

「っ♡」

「うわっ!？」

その言葉に、光の肉壺はより痙攣し、勇太の肉棒を締め上げた。

「…!っ!!!!…ちょっと、ヤバかったって!？」

「ご…ごめん。その…あんたが可愛くて…。」

光が素直に謝るのが勇太には意外だった。

「ふふ…童貞卒業おめでと♡

ちょっと、落ち着くまで待つ？」

「うん。」

その言葉に、光は脚を勇太の腰に絡め、頭を勇太の顔にぐりぐりと擦りつけた。

「どうしたの？」

勇太は少し、落ち着いたのか余裕を取り戻し始めていた。

「いや、今まで馬鹿にしてた連中の事笑えないなって。」

「？」

「あんたの初めてが貰えてすごい嬉しいの、深い処であんと繋がったのが私で、今からこれからずっと、私だけのものって思うとなんか…凄い幸せなの。」

「…正直そう言って貰えて嬉しいというかホッとしてる。」

「？」

「…えっと、こういうところで本当は言っちゃ駄目だって、俺でも分かってるんだけど、光は色んな人と経験あるし、俺よりずっと、人としての経験値とか魅力とかテクニクだって凄い人もいただろうし、なんかその…負けるのが悔しかったと…言うか…あだだだだだ」

光が勇太の首に思いっきり噛み付いた。

「それで、緊張してたって訳？」

「まあ…はい。」

「人としての魅力って全員ロリコンの変態よ？」

それに、あんたさっき、私の顔見てたでしょ。

その…やっぱり全然違う。

快感も全然違う、なんか…幸せっていうか…すごいドキドキするっていうか…その好きな人とするってこんななんだっていうか…初めてみたいなの…感覚。」

光の声は震えて、顔は見えないが、伝わる熱から恥ずかしがっているのが分かった。

「もういいでしょ、ホラ!しゃきしゃき腰動かす!」

「ムードもクソもないなあ…んっ」

光がグチグチ言う勇太の口を重ねて黙らせる。

勇太は光の太ももを抱え込むようにして引き寄せる。

そのまま、お互いがどこが気持ちいのかを本能で感じ、若い身体でくねらせ絡みつくように行為を再開した。

「あっ♡うん♡ああっ♡」

ぬちょぬちょと粘液状の音を立て、ピストンすると、身悶える。

白い柔肌に汗が滲みお互いの髪、唾液、粘液が絡み合っていく。

「ゆう…た♡…ごめ、ちょっとイッ…♡つつ!!」

光の白い身体が痙攣して腰が上がり大きく震える。

「ひか…締ま…俺も射精…るっ!」

それに呼応し、光の膣も引き締まり勇太の陰茎を刺激し、射精を一気に促した。

勇太は自分の陰茎が蠢き、精子をとめどなく続いた。
それは、勇太が光を自分の【番い】とすべく身体が心が起こしたものであった。

…

「すご…水ヨーヨーみたい!」

光は、自身に注がれた欲望を見てキャッキヤと騒いでいた。

「光、バッチイよ。ていうか恥ずかしいって!」

ハイハイと光はコンドームをゴミ箱に捨てる。

そして、勇太の方を見てニヤッと笑った。

「あんた、私の事大好きすぎるでしょ。」

勇太の顔が見る見るうちに赤くなる。

「ほら!もう一時だし寝よ!」

「?」

勇太が腕を広げている。

「その…おいで…。」

光は更に口角を上げ、勇太に飛び付き頭をぐりぐりと勇太の胸にこすりつける。

「ふふ…なんていうか先より今のが幸せって感じがするわ。」

「…うん。俺もだよ。」

日が登った頃にはもう昨日までの暴風雨が嘘のように綺麗な青空が広がっていた。
「おっ! いたいた! 大丈夫だった! ? ふたりとも! ?」
「勇太! 心配したよ!」
「ひかり、さびしかった!」

合流箇所を駆け寄って来る良子達であったが、勇太達の様子を見て良子は一気に気持ち悪い程口角を上げた。

「おんやああ、おふたりさん手なんか繋いで、それに昨日より距離近くない?」
「?」 「?」

ヴォーボモンとデビドラモンは良く分かっていなそうであったが、勇太と光はハッとして手を離した。

「よく見ると勇太君の首それって! おやおやおや?」

「ちょっと良子さん…!」

「いんや、遠慮しないね! だって私達が必死こいてる間、よろしくやってたって事でしょ! ? …アテムカついてきわたね? ちょっとこりゃあ1から100まで聞かせて貰うわよ!」

「んぐっ…いやそりゃあ…。」

勇太と光は罪悪感と良子の圧に負けて、引き摺れて行くのであった。